



梅屋庄吉は、孫文が出会った初めての日本人。1895年、庄吉27歳・孫文29歳。庄吉が経営する香港の写真館で、ジェームス・カントリー医学博士の紹介で、ふたりの交流がはじまりました。当時、西欧列強諸国の圧力に苦しんでいたアジア全体は、独立自尊の道を確保すべきだと、ふたりは肝胆相照らし「君は兵を挙げよ、我は財をもって支援す」との盟約を結びました。

梅屋庄吉は、その生涯を通して「盟友にして義兄弟」の孫文のために、物心両面を挙げて支援を行いました。「辛亥革命」遂行中には私財を投じて、武器・弾薬・飛行機等の調達をはじめ、多額の資金援助を繰り返しました。孫文の死後も、孫文の思想と遺志を守り続け、中国人民のために孫文の銅像4基を製造して中国各地に寄贈するとともに、当時の広田外相と協力して、日中友好のために懸命の努力を重ねました。

梅屋庄吉・トク夫妻の仲立ちによって、孫文は亡命中の1915年梅屋邸にて宋慶齡(a)と結婚披露宴を行いました。中国に無事帰国するまでのあいだ、宋慶齡は梅屋邸にあった燭台付きのピアノを弾いたり、歌を歌ったりして過ごしたそうです。



そのピアノは日本楽器製造株式会社(ヤマハの前身)1907年製造で、国産最古のもののひとつです。庄吉夫妻がその愛娘のために購入し、その孫たちが戦災を避けて保存していたものです。孫文が滞日中に、しばしば当松本楼を訪れていたことと夫人の宋慶齡が親しんでいたピアノであることを記念として寄贈された「孫文夫人ゆかりのピアノ」が、当松本楼日比谷本店1階ロビーの右手に展示されております(b)。

中国革命の父として称えられている孫文は、日比谷松本楼のなじみ深いお客さまでした。当松本楼の現社長の曾祖父である梅屋庄吉は「辛亥革命」の遂行中に日本に亡命せざるをえなかった孫文を、日本の名士各位に紹介するため、幾度も当松本楼で宴会を催しました(c)。孫文は「辛亥革命」に邁進しました。



梅屋庄吉は、帰国後東京に活動写真の配給・制作会社<Mパター商会>を設立。白瀬中尉の南極探検や辛亥革命に自社カメラマンを派遣し、ドキュメンタリーを完成させます。その後、日本活動写真株式会社(日活)を創設するなど、草創期の我が国の映画界をそのアイデアと行動力でリードしていきます。そうした事業で得た利益の多くが、孫文と革命支援の日本の志士たちに提供されたのです。

孫文は、庄吉夫妻の支援に感謝するひとつとして、庄吉の羽織の裏に「賢母」と揮毫されました(d)。新中国の産みの「父」である自分と対比して、その「母」である庄吉。その羽織は、自分と宋慶齡を慈母のように慈しんだ庄吉・トク夫妻のふたりを顕彰するために残されたものです。

辛亥革命秘話

君は兵を挙げよ、
我は財をもって支援す



梅屋庄吉

孫文

日比谷
松本楼

SINCE 1903